

地域住民による木材資源の生産活動 —フィリピン東ネグロス州とインドネシア東カリマンタン州の比較から—

平成 17 年入学
鈴木遥

研究の背景

東南アジア島嶼部では、1960 年代ごろから、木材企業による大規模な森林伐採が行われてきた。商業的な伐採活動は、フィリピンにはじまり、その後、インドネシア、マレーシアへと移っていった。現在、フィリピンでは、ミンダナオ島にわずかながら森林がみられるものの、木材を生産するための森林はほとんど残っていない。インドネシアでは、カリマンタン島に残る森林などにおいて、現在も木材の生産が行われている状況である。地域によって程度の違いはみられるが、商業的な森林伐採により東南アジア島嶼部の森林は荒廃し、木材資源は急速に減少してきている。

木材資源が急速に減少するなか、木材生産によって暮らしを営んできた人々は、生業の見直しを迫られている。これまで、彼らは、彼ら自身が利用するために木材を生産してきたほか、伐採企業に木材を売ることによって、収入を得、暮らしを営んできた。しかし、現在、彼らの木材生産の活動は、木材企業の撤退による木材の販売先の減少や、政府の森林保全政策による木材生産の活動の制限などによって、縮小を迫られている。

これまでの商業的な木材生産の仕組みを地域社会にとって持続的なものにしてゆくためには、地域社会において木材生産に従事してきた住民の暮らしの現状をまずは理解することが重要である。そこで本研究では、木材生産者の生業の実態を明らかにすることを目的とし、森林の荒廃段階の異なるフィリピンとインドネシアにおいて、フィールドワークをおこなった。

調査地域

1 フィリピン東ネグロス州バレンシア町

バレンシア町の山間地域では、森林の伐採が古くから行われてきた。しかし、その結果、森林の荒廃が進み、山間地域での土砂崩れなどの被害が起こるようになってきた。この状況を受けて、同町では、1992 年から現在に至るまで、町の山間地域において、水源涵養林を修復するための植林事業が行われている。この植林事業は町の農林局が中心となって進められているもので、苗の生産や植栽などに多くの住民が関わっている。さらに、この植林事業のなかでは、森林官という、森林を保全するための新たな雇用も生みだされている。

2 インドネシア東カリマンタン州スブルー郡スンプル・サリ村

スンプル・サリ村は、東カリマンタン州の内陸部に広がる低湿地に位置する。同村は、

1982年にインドネシア政府の移住政策によって作られた村で、住民のほとんどは、ジャワからの移民である。移住当時、政府は彼らに土地を与え、農業への就労を図った。しかし、彼らの多くは、農業よりも短期間でまとまった収入を得ることのできる木材生産によって生計を立てた。木材生産の活動に従事するために、新たにジャワから移住してくる者も少なくなかった。しかし、2006年以降、木材生産に対する規制が政府によって強化されたことを受けて、木材生産者の活動は厳しく制限されている。

研究期間と研究方法

調査を行った期間は、2008年3月31日から2009年4月26日である。上記した二つの地域において、農林局の職員や木材生産者に対して、聞き取りをおこなった。

木材生産者の生業の変化

1 木材生産から森林保全へ：フィリピン東ネグロス州バレンシア市の事例より

バレンシア町では、農林局が行う植林事業によって新たな雇用が生み出され、これによって、木材生産者の生業に少しずつ変化がみられるようになった。バレンシア町に暮らす Jymone 氏は、同町の保有する森林地域において違法な森林伐採を行い、木材を生産することで生計を立てていた。2000年に植林事業がはじまると、彼は、この事業のなかで森林官という新たな雇用を得た。彼以外にも、5人の元木材生産者が、現在、森林官として雇われている。彼らの仕事は、町の所有する森林地域の巡視、違法伐採の取り締まり、住民の植林活動の指導を行うことなどである。植林事業のなかでは、森林官以外にも、植林用の苗の栽培や、苗の植樹などの新たな雇用が生まれており、元木材生産者を含む多くの住民がこれらの活動に携わっている。

バレンシア町の植林事業は、森林の保全による新たな雇用創出の可能性を示唆するものである。これらの雇用は、木材生産者の新たな収入源となり得るだろう。

2 木材生産から農業へ：インドネシア東カリマンタン州スンプル・サリ村の事例より

スンプル・サリ村では、木材資源の減少や、政府による木材生産に対する規制の強化などによって木材の生産活動が衰退していた。このため、近年では、木材生産から農業に生業を転換する人が増加していた。1982年の開村当時からスンプル・サリ村に暮らす Dariantio 氏は、2008年に、木材生産から農業へと生業をきりかえた。1980年代から1990年代にかけて、彼は、開村当時に政府から与えられた土地で農業を行いつつ、村周辺の森林を伐採し、原木を販売することで生計を立てていた。2000年になると、彼は、本格的に木材生産を行うようになった。彼は、木材運搬用のトラックを購入し、村内に小規模な製材所をつくった。そして、親戚や隣人などを組織して、木材を生産した。その後、2006年から2008年にかけて、木材生産に関する政策は、徐々に強化されることになる。彼は、政策が改定されるたびに、政府から木材生産に必要な許可を取り直さなければならなくなっ

た。さらにこの時期には、原木自体の減少も深刻化していた。このため、Dariantio氏は、木材生産に見切りをつけ、農業へと生業を変えることを決心した。現在、彼は約2haの畑を所有し、トウモロコシやアブラヤシなどの生産を行っている。また、パルプ用材である早生樹 Sengon (*Paraserianthes falcataria*) の植林も行っている。

スンプル・サリ村では、木材生産は住民の生業として持続していない可能性が大きい。一部の住民は、木材生産に変わる新たな生業として農業を選択していた。では、農業は住民にとっての安定した生業になり得るだろうか。この点については、現時点ではまだ判断できない。今後も、彼らの生業を継続して調査する必要があるだろう。

おわりに

本研究では、フィリピンとインドネシアの事例から、木材生産者の生業の実態を明らかにした。両地域において、木材生産は、彼らの生業としてもはや成り立たなくなってきた。そのため彼らは、木材生産に変わる新たな生業につくことで対応しつつあった。フィリピンの事例からは、森林保全の活動が、彼らの新たな生業に結びつく可能性が示唆された。今後、生業を転換する木材生産者は、さらに増加することが予想される。そのため、彼らのための十分な雇用の確保や、土地や資金の援助などの対策が必要となるであろう。

本共同研究では、報告者がこれまで足を運んだことのないフィリピン東ネグロス州とインドネシア南スラウェシ州を訪れる機会をいただいた。木材資源の減少による木材生産者の生業変化という問題はどの地域においても共通してみられたが、その状況は大きく異なることを改めて感じた。また、本共同研究では、異なる研究の着眼点を持つメンバーと共にフィールドワークを行うことで、自身の調査地域の新たな一面を知ることができたことも、大きな収穫であった。本共同研究の成果をもとに議論を深め、今後も継続して研究をおこなってゆきたい。



写真1
森林官の Jymone 氏と植栽された樹木の苗 (2009年4月2日にフィリピン東ネグロス州にて筆者撮影)



写真2
植林が行われている山間地域の様子 (2009年4月2日にフィリピン東ネグロス州にて筆者撮影)



写真3
農業をはじめた Darianto 氏とトウモロコシ畑（2009年4月17日にインドネシア東カリマンタン州にて筆者撮影）



写真4
小規模製材所（2009年4月17日にインドネシア東カリマンタン州にて筆者撮影）



写真5
トウモロコシやアブラヤシなどが植えられた畑（2009年4月17日にインドネシア東カリマンタン州にて筆者撮影）